



アジアカップ、アジアマスターズ、アジアジュニア大会 ITO 参加リポート

FISA 審判員 (1372、東京都所属) 栗山 俊久
FISA 審判員 (1782、東京都所属) 山崎佳奈子
FISA 審判員 (1792、東京都所属) 川崎 健治

<はじめに>

2019年12月18日(水)から12月22日(日)まで、タイ王国パタヤ市バンパイ貯水池にて開催されたアジアカップ、アジアマスターズレガッタ、アジアジュニア選手権に国際審判員(ITO)として参加しましたので、以下ご報告いたします。

<大会概要>

日時： 2019年12月18日(水)～12月22日(日)

コース： Water Sport Training Centre at “BangPhai Reservoir”

種目： (アジアカップ) Men (Open): M1x, M2x, M2-, M4x, M8+
Women (Open): W1x, W2x, W2-, W4x, W8+
Men (Light Weight): LM1x, LM2x, LM4-
Women (Light Weight): LW1x, LW2x, LW4x
(アジアマスターズ) Men: M1x, M2x, M4x, M4-, M8+
Women: W1x, W2x, W4x, W4-, W8+
(アジアジュニア) Men: JM1x, JM2x, JM2-, JM4x, JM4-, JM8+
Women: JW1x, JW2x, JW2-, JW4x, JW4-, JW8+

距離： (アジアカップ、アジアジュニア) 2,000m、(アジアマスターズ) 1,000m

コースはパタヤから車で約30分、Klong Bang Phaiにある貯水池で Royal Navy Rowing Centre という海軍の施設であった。乾季であるタイではコース水量が少なく、実際は2,000mがとれず1,900mにてアジアカップ、アジアジュニアが行われた。(決勝線の位置はそのままで発艇線を100mフィニッシュ側に移動させた)



貯水池(海軍施設)



フィニッシュタワー



艇庫(OC本部)

同じ会期中で3つの大会を同時に開催することは、それによるデメリットも多く目立った。用意された艇の数が足りず配艇スケジュールが破綻しており、結果として配艇レースがあるたびに遅延が頻発した。ダブルエントリーが認められており一人の選手が複数の大会、レースに出場することが可能であったが、レーススケジュールにまで配慮がなされておらず、これもレースの遅延やスケジュール変更を余儀なくさせるな



どの問題につながった。さらには途中にはさんだ 1000m レース時において発艇位置を時間内に移す作業にも失敗した。複数大会の同時開催は、効率化が可能になる一方で一つ一つのレース運営が疎かになるなど大きなデメリットが生じる。このようなことにならないよう、ARF 加盟の各国が責任を分担し、それぞれの大会の開催に向け努力する姿勢を持つべきだと感じた。

<審判員>

President of Jury : SENDA Takao(JPN)

ITO : 16 名

NG See Hung(HKG), NG Wing Ning(HKG), HEBLEKAR Krishnanand(IND), KARMAKAR Rupam(IND), KURIYAMA Toshihisa(JPN), YAMAZAKI Kanako(JPN), KAWASAKI Kenji(JPN), HAN Kyunghwan(KOR), KAY Dong Hoon(KOR), HTAY Yin Min(MYA), KHAIG Mon Mon(MYA), KHAN Imtiaz(PAK), IKRAM Arif(SGP), RUPESH Sharma(SGP), RACHNAVY Pornthep(THA), MAO Ying-Hai(TPE),



<ITO 配置>

- ① POJ:President of Jury (審判長) 1 名
- ② Umpire (主審) 4 名
- ③ Starter (発艇長) 1 名、Assistant Starter (発艇) 1 名
- ④ Judge at the Start (線審) 1 名
- ⑤ Responsible Judge at the Finish (判定長) 1 名、Finish Judge (判定) 1 名
- ⑥ Responsible Control Commission (監視長) 1 名、C.C. Out Pontoon(出艇棧橋監視)2 名、C.C. In Pontoon (帰艇棧橋監視) 1 名、Athlete Weighing (選手計量) 1 名、Boat Weighing (艇計量) 1 名
- ⑦ Board of Jury (審判審査会) 3 名 (毎日変わる)

ITO については加盟各国から均等に選ばれているように見えるが、その選考方法について日本との大きな違いがあった。国際大会では、各国からノミネートされた審判員を国際ボート連盟の審判委員会にあたる Umpire Committee が相対的評価で選考し結果が通知される方式であり、その過程では過去の実績や経験、コミュニケーション力などが総合的に判断されている。上位大会になればなるほどシビアに評価されるという。日本では審判委員会には個々人を評価し選考する機能はない。資格級や能力を認定するシステムはあるが、明快な基準による絶対的評価によるもので、国際連盟の方式とは逆である。



2019 Asian Rowing Cup
2019 Asian Rowing Masters Championships
2019 Asian Rowing Junior Championships

部署配置においては、President of Jury により日ごとに決定される。こちらにも綿密な考慮がなされていた。各審判員の技量を把握し、ときに各国協会の事情や背景も考慮しながらの配置やペアリングにより、タフな状況が続く中で大会が成功したと感じる。大会の審判の選考が Umpiring Committee の重要な責務であることや選考において全加盟国が納得する基準・論理づくりと透明性の維持が求められることは、国内でも国際大会でも同じだと感じた。

<大会前>

11月初旬に ARF より大会 ITO としての Invitation Letter が届く。
その後、VISA 取得の連絡と VISA Letter が届く。

*コンタクトパーソンの Captain Jirames Wongsanittadech 宛にパスポートコピーの提出及び連絡の名前と「WhatsApp」連絡用の携帯番号を提出する。空港の出迎えから全ての連絡はこの WhatsApp を通して行われる。空港からホテル、大会会場まで、いずれも車で2時間程度かかる。今回は全員の送迎がうまくいかず、空港で数時間待たされた ITO も少なくなかった。

正式な Invitation Letter を受けてから渡航準備を始めるため、もっと早く OC からの連絡があればゆとりを持って臨めると感じた。現地での受け入れ等についても、滞りなく進めることができたのではないかと感じる。

※本大会には POJ を含め日本から3名が決定していたが、大会直前に欠員が発生し補欠代替もできなかつたため、急遽 NTO 参加予定だった栗山が ITO として参加することになった。



To: YAMAZAKI Kenako from JPN

On behalf of Rowing and Canoeing Association of Thailand (RCAT) and of the Organizing Committee (OC). It is my great pleasure to invite you to participate as Umpire/ITO in 2019 Asian Rowing Junior Championships, 2019 Asian Rowing Masters Regatta and 2019 Asian Rowing Cup which will be held at the Royal Thai Navy Rowing Center(Klong Phai), Pattaya, Thailand during 18 to 22 December 2019 for the competitions. All the local transportation, accommodation and meals will be OC's responsible. The international transportation will be by your own.

Below you will find some general information about the Championships included with the roughly timetable of events. All the details, please refer to the circulated Bulletin and www.asiaocpa.com

List	Detail
Venue	Royal Thai Navy Rowing Center (Klong Phai)
Accommodation	Ambassador City, Jomtien, Pattaya
Date of competition	18 - 22 December 2019
Venue Inspection	17 December 2019 time : 09:00 at venue
Team Managers Meeting	17 December 2019 time : 14:00 at venue
Jury/Umpire/ITO meeting	17 December 2019 time : 15:00 at venue
Opening ceremony	18 December 2019 time : 17:00 at venue
International Airport for Arrival	Suvarnabhumi International Airport Meeting Point: Arrivals Gate No.3 Donmuang International Airport Meeting Point: Arrivals
OC contact person	Capt. Jirames Wongsanittadech jiraj192@gmail.com +667 7966 3972

I look forward to welcoming you.
Yours sincerely



Ratan Nangul Kittrakul
Chairman, Organizing Committee and
Secretary-General, RCAT
8 November 2019

RCAT Office 147/148 Chommanrakasit Bldg., 2088 Sports Authority of Thailand, Raminchandra Rd., Huaykhong, Bangkok, Bangkok 10240
Tel: +662 176 4238 Fax: +662 176 4236 E-mail: info@rcat.or.th

<12月17日(火) First Jury Meeting>

大会前日の First Jury Meeting の前にコース検分が行われたが、スタートタワーにはまだ階段もついておらず、スタートシステムも設置されていなかった。このコースは IMAS (タイミングプロバイダー) による Raising Start System が装備されているが、乾季で水深が足りずにブーツは使用できず、スタートシステムのみ使用した。



スタートタワー



線審小屋



フィニッシュタワー内

Meeting では POJ より以下の連絡があった。

- 1) アジアカップとアジアジュニアは 2,000m が取れず、1,900m のレースで行う。
- 2) アジアマスターズは 1,000m レースで、1,000m 地点からのスタートとなるため、発艇塔を 1,000m まで移動させる。また水深が確保できるため IMAS の Raising Start System を使用する。
- 3) テストスケールが準備できていないため、初日の艇計量は無し。
- 4) スタート区域 300m は水域がとても狭いため、一度にクルーを呼び込まず、1艇ずつ呼び込む事。
- 5) 審判艇は 5艇、レース間隔が 10分なので十分に戻る時間がある。波を立てずにゆっくり戻る事。



6) ITO と NTO Lead のコミュニケーションツールとして WhatsApp を使用する。

<部署配置>

○12月18日(水)大会初日

午前：Umpire 2 (山崎)、Judge at the Start (栗山)、Control Commission OUT(川崎)

午後：Finish Judge (川崎)、Responsible C.C. (栗山)、Control Commission IN (山崎)

○12月19日(木)大会2日目

午前：Umpire 2 (川崎)、Finish Judge/Responsible Judge at the Finish (栗山)、Athlete Weighing (山崎)

午後：Umpire 2 (栗山)、Assistant Starter/Starter (山崎)、Control Commission IN (川崎)

○12月20日(金)大会3日目

午前：Finish Judge/Responsible Judge at the Finish (山崎)、Control Commission OUT (栗山)、Boat Weighing (川崎)

午後：Umpire 1 (栗山)、Assistant Starter/Starter (川崎)、Control Commission OUT (山崎)

○12月21日(土)大会4日目

午前：Umpire 2 (山崎)、Umpire 4 (川崎)、Assistant Starter/Starter (栗山)

午後：Umpire 2 (栗山)、Responsible Judge at the Finish /Finish Judge (山崎)、Control Commission OUT (川崎)

○12月22日(日)大会最終日

午前：Assistant Starter/Starter (川崎)、Boat Weighing (山崎)、Responsible Control Commission (栗山)

午後：Assistant Starter/Starter (栗山)、Judge at the Start (山崎)、Control Commission IN (川崎)

<各部署に関して>

【Umpire】

レース初日から5艇ある審判艇のうち、1艇が使用できないことが発覚。4艇で回すことになった。また、水量不足のため1レーン側の陸地がせり出しており、危険な状態になっていたため、POJより審判艇はスタート直後、1レーンをフォローするよう指示があった。また、配布されたスタートリストとクルーに配布されたバウナンバー表が違っており第一レースから混乱が起きていた。

Schedule - Wednesday, Junior W

09:00 - Race 1

1	THA	Thailand	296 - NATTARIWAN, NUNCHAI; 307 - PREMUETHAI, HONGS
2	HKG	Hong Kong	006 - CHENG, CHEUK KWAN; 036 - YING, HIU SZE
3	UZB	Uzbekistan	352 - TAGMATOVA, MALIKA; 333 - BOBOMURODOVA, SAYYO
4	IND	India	057 - BIJU, SNEHA; 050 - AINICKAL, AMRUTHA DILIPKUMAR
5	TPE	Chinese Taipei	268 - RUAN, YA XUAN; 250 - CAI, XIN YU

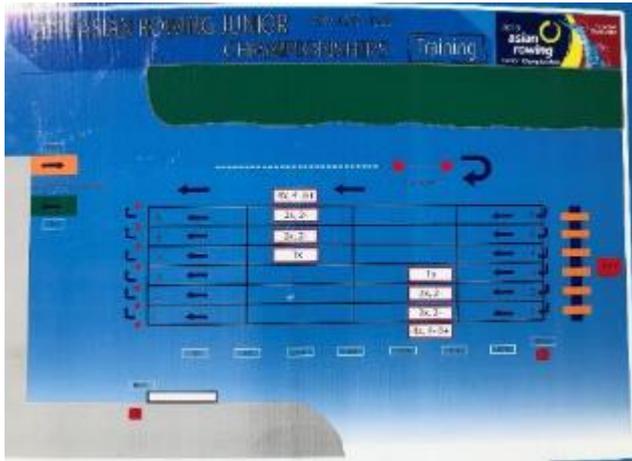
Following Heats:
December 21, 09:00 - Race 48 - Final

JW2-[6]

Boat Number	Federation	
1 <	HKG	CHOI YING LEE
2 <	IND	BIJU SNEHA
3 <	TPE	RUAN YA XUAN
4 <	THA	NATTARIWAN NUNCH
5 <	UZB	TAGMATOVA MALIKA
6 <	VIE	DUI THI BONG



また、左の写真のように審判艇で使用する鐘が用意されていたが、持ち手が無く、屋根付きの審判艇の骨組み部分に紐で取り付けるといった方法をとっていた。これは波や風で鐘が鳴ってしまうので、すぐに取り外して足元に置くことにした。



航行ルール（練習時）

レースの航行ルールがわかりづらく、ジュニア選手も多かったことからレース初日から航行ルール違反が続出した。

ルール上は白ブイの左から出て練習水域、スタートに移動するが右図のように右側を漕ぐクルーが多かった。



航行ルール（レース時）



【Starter/Assistant Starter】

< Starter >

分読み・呼び込みをする。2分前信号を点灯させる。スタート号令をかける、スタートボタンを押す。

< Assistant Starter >

Starter の補助、待機クルーの確認。



IMAS のスタートシステム



イエローカードを日よけにするボートホルダー

IMAS のスタートシステムを使用、ただし水深が足りなかったため、自動発艇装置は使用しなかった。

日本では Starter が発艇号令をかけ、呼び込みを Assistant Starter に任せてしまうケースが多いが、FISA では原則通り発艇号令をかける Starter が呼び込みをする

途中イエローカードを日よけにするボートホルダーがあり (!)、注意を与えた。

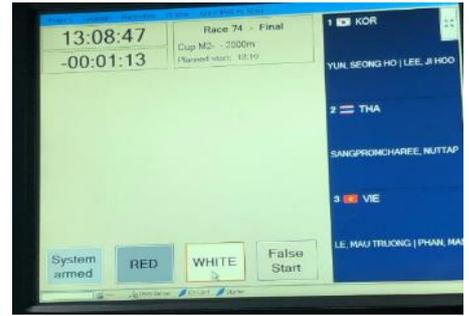
【Judge at the Start】

<Aligner>

艇揃えをする。現地の NTO が現地の言葉でボートホルダーに指示を出す。ボートホルダーに無線を持たせていないため Aligner からの指示は秘話方式ではなくスピーカーを通じて行われていた。

<Judge at the Start>

艇首が揃ったのを確認し、白ランプを点灯させる。フォルススタートの場合は「False Start」ボタンを押す。Judge at the Start は通常発艇直後に静止画像となるスクリーンを使用するが、その装置がなく目視にて実施した。第一レース前にボートホルダーの移動手段がなく、泳いで移動させなければならなかった。



ボートホルダーの移動手段がなく泳いでもらった IMAS システム、「WHITE」は白旗を意味する White Light

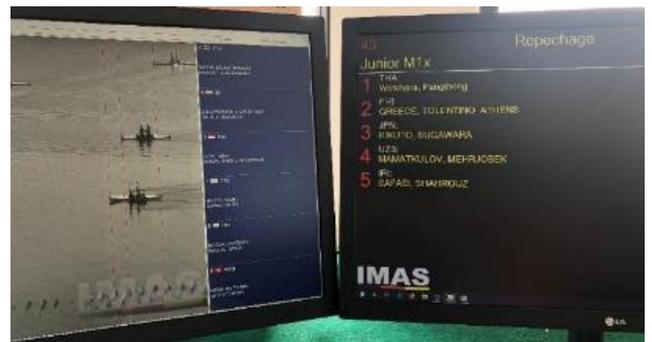
【Responsible Judge at the Finish/Finish Judge】

<Finish Judge>

フィニッシュラインを通過した通過順（バウナンバー）を言いブザーを鳴らす。審判艇からの白旗を確認し「White Flag」と言って、NTO に白旗を挙げさせ、着順作成作業開始が可能になったことを判定塔内で共有する。

<Responsible Judge at the Finish>

レースが近づいたら（100m手前位）、「Race○○,Coming!」とコールし判定塔内を静粛にさせレースに集中させる。Responsible はモニターを見ているので、フィニッシュラインを直接には見ない。



片側にフィニッシュライン、反対側にリザルトとスタートリストが映しだされる

リザルトシートの確認手順

- ①ヘッダー部分のチェック（種目、ラウンド、レース No.など）
- ②通過順と画面とのチェック（バウナンバー）
- ③クルー名のチェック（1位から順になっているか、国名は正しいか）
- ④フィニッシュタイムのチェック（おかしくないか）
- ⑤中間タイムのチェック（論理的矛盾が無い）
- ⑥勝ち上がり数が正しいか（3/5 上がりなど）

全てをチェックした上で、問題無ければ Responsible がサインをし「Race ○○ Official!」とコールし、レースの成立を宣言する。

リザルトシート

【Control Commission】

<Responsible>

Control Commission OUT、Control Commission IN、Athlete Weighing、Boat Weighing 全ての部署を取りまとめる責任者。

<Control Commission OUT>

出艇桟橋で確認する項目は以下の通り

- ① クルーメンバーの確認 (ID カードと選手の顔写真、名前が合っているか)
- ② シート順
- ③ ユニフォームとブレードの確認 (統一されているか)
- ④ バウボール、ヒールロープの確認
- ⑤ 正しいバウナンバーをつけているか
- ⑥ デッドウェイトを携行しているか
- ⑦ 国名を含むステッカー類を正しく貼っているか
- ⑧ レースごとにすべてのクルーが水上に出たか

今回はアジアの大会でジュニアもいるため、予選では POJ からイエローカードに相当する事も Reprimand (譴責) として指導するよう指示があった。初めて大会に出るクルーも多く、教育的な観点から罰するよりも指導をする方針で対応した。配置される審判によって確認場所が様々であり、また、確認事項も多く、常にバタバタしている印象がある。

<Control Commission IN>

帰艇桟橋で確認する項目は以下の通り

- ① デッドウェイトを携行しているか
 - ② 艇計量対象クルーへの指示
 - ③ アンチドーピングに選出されたクルーの特定
 - ④ レースごとにすべてのクルーが戻ってきているか
- 通常の FISA 大会のように桟橋にて計時担当者がバウナンバーをとりつけるのではなく、配艇所に各クルーがバウナンバーをとりゆき、クルー自身がバウナンバーをとりつけてから桟橋に来るといったやり方をとっていた。

表彰式がある日には表彰クルーは帰艇後すぐに表彰ステージに移動する必要がある。レースが終了すると POJ が入賞クルーを無線で連絡し、連絡を受けた主審はクルーに帰艇桟橋ではなく Umpire Boat Pontoon に向かうよう指示をする。Umpire Boat Pontoon では ITO が待機し、すぐに陸上で待機しているトゥクトゥク車に乗り、表彰ステージに向かう。この一連の動きをスムーズに進めるには関係各所との連携が大切だと感じた。



表彰ステージに向かう選手

<Athlete Weighing>

アジアカップに軽量級種目があったので、早朝から選手計量が行われた。舵手軽量のためのデッドウェイトが無かったので、NTO にデッドウェイトを持ってきてほしいと頼んだら、写真のような錘が用意された。どうやらデッドウェイトというものが理解できていないらしかったので「小石、もし無ければ最悪砂でもいいが、それとビニールバッグを用意して欲しい」と頼んで準備させた。



選手計量所



錘?



作ったデッドウェイト

<Boat Weighing>

ボートスケールが2つあり、両方の数値を足して計算する方式をとっていた。



手前側



奥側 数値を合計する

<審判団の統率>

国際大会における審判団の特徴は、日本の全ての審判員が熟読する『審判員の心得と号令・動作』のようなマニュアルがなく、大会に参加の経験を積み上げることで号令・動作に熟練し、また各審判の裁量権がかなり認められているということからもわかるように、各審判の責任と独自性が認められている。

この裁量権と独自性のもとに審判員は各部署にアサインされるが、定期的きちん大会に出ていなければ、正しく号令がかけられなかったり誤ったやり方でレースを運営することになってしまう。事細かなレクチャーをしない一方、一人ひとりの審判員に技量と責任が備わっていることが当然とされている。従って業務レベルが未熟な場合にはシビアに評価され、後々の派遣選考にも響くことになる。ARF 大会では日本の審判員が他の審判員から質問を受けるなど指導的立場を求められるシーンも多くあるように日本の審判員のレベルは相当に高い。その自覚がなければ、正しくないやり方で審判をしているアジアの審判を見ても何も感じず、アドバイスをすることもなく、ともすればその間違ったやり方を覚えてしまうようなことになりかねない。FISA ルールを自分がきちんと習得していることに自信と責任を持ち、自らが研鑽するだけでなく、アジアの審判を指導しく役割を担ってゆかなければならない。

今回アジア各国審判員にアドバイスした点につき、我々日本の審判業務にも参考になるものを列挙する。

① Starter(発艇)

- ・呼込みの際、まだ遠くにいるクルーを呼込むと、斜めに横断してレーンに入ってしまう。呼込みはきちんと待機場所に来るまではしないこと、待機場所まで来ないクルーはコースに入れず回漕レーンにて近くまで来させること、呼込んでもないのにコースに侵入したクルーはいったん外に出すこと、そして次レースでは正しくできるようクルーに伝えるよう指導した。
- ・発艇信号のうち、ひとつは Starter に向けて設置させること。当初すべての信号がクルー側に向けて設置されており Starter から発艇信号の色が確認できなかったため位置を修正させた。
- ・発艇 2 分前以前に白ライトを点灯させた線審を咎めようとした発艇員に対し、2 分前までは白ライトをつけてはいけないというようなルールはないと説明した。
- ・5 分前まで呼込みをしない発艇員がいたので、クルーが待機位置に来たならばすぐに呼込むこと、また呼込んだクルーにはきちんと残り時間を告げること、さらに自己のレーンで練習してよいことを伝えるよう指導した。
- ・自己のレーンでスタート練習したクルーが回漕レーンを使い発艇まで戻ってきたのを黙認したので、呼込み後は自己のレーンからは出ないようクルーに伝えさせた。

② Judge at the Start (線審)

- ・アライナーが線審小屋の前で地面に記した印と対岸の見通し板を使って艇首をそろえていたので、すぐに辞めさせ、線審の後ろに立たせ、スリットを通して対岸の見通し板と合わせるようにさせた。
- ・ボートホルダーが各ポンツーン 1 名の 6 人の配置で、一人でポンツーンを前後させたのち艇尾をつかみ、それ以降は腕で前後させていたので、すぐに追加 6 人を手配、各ポンツーン 2 名体制とした。
- ・アライナーが、艇首がそろった段階で、「そろいました」とその都度報告するので、そろったかどうかは線審が判断するので報告は不要、白ランプ点灯後も含め、常時艇首揃えを続けるよう指導した。

③ Umpire (主審)

- ・2 ハイ上がり 6 パイレースで 2・3 レーンのクルーが突出して先行していた。上がりクルーが確定しているからという理由で、かなり離れた後ろの残り 4 ハイの集団を追航していた主審に、レース終了後 2・3 レーンが接触しそうな時に即座に対応ができる位置取りをするよう指導した。
- ・ほとんどの主審がひき波の影響ばかり考え、レースからかなり遠くに位置取りをしていた。上り数に関係がなくなったクルーに引波をかけない配慮をすることより、上がりに絡んだクルーに何かあった際でも声が届く位置に主審がいることを優先するようアドバイスした。

④ Judge at the Finish (判定)

- ・Result sheet の国名が正式国名ではない国がいくつかあったため訂正させた。
- ・配布された Start List において、6 ハイ以下のクルー数のレースで、まだ使用レーンが審判長よりアナウンスされてもいないにもかかわらず、クルーに勝手に途中レーンがアサインされて記載されていたので、出漕クルー数にかかわらず全レース 1 レーンからつめて表記するよう修正させた。その上で、実際の使用レーンは審判長からアナウンスされることを伝えた。
- ・主審艇の白旗が上がったのを見た NTO が勝手に主審に対し確認の白旗をあげていた。主審の白旗は「着順をつけてよい」という主審から判定員への指示なので、その確認は ITO がしなければならないことを説明し、NTO は ITO の指示があるまでは勝手に白旗をあげないよう徹底した。

⑤ Control Commission (監視)

- ・OUT 担当者が seat 順を確認していなかったため、seat 変更は構わないが seat 変更を見つけたら必ず競漕委員会に届けるよう選手・コーチに徹底するよう指導した。
- ・OUT 担当者がヒールロープを確認していなかったため、必ず確認するようにさせた。その結果、初日に 20 クルー以上に不備が見つかった。
- ・デッドウェイトを作るための準備がされていなかった。

以上、主なものをあげた。海外に審判にでると正しくないルールがなされていても、往々にしてこの国ではこういうやり方をしているのかと納得してしまうことも多いがそれは必ずしも正しいとは言えない。特にアジア各国の審判は自国のルール、やり方を国際大会に持ち込むことが多いことを認識しなければならない。それを黙認してしまうとルールがどんどん変わってしまう。間違ったやり方を見つけたら迷わずきちんと相手に伝え訂正させることが重要である。アジア各国は日本や韓国とは異なり自国ルールがないため、もともと FISA ルールを使って大会を運営している。このため自分のやり方が FISA ルールだと信じ切っていることが多いが実際は FISA ルールを厳格に適用しているわけではなくローカル化されている場合がほとんどである。我々日本の国際審判員は、もし正しくない運用を見つけた際には、自信をもって提言し、もし不安であれば審判長に相談する姿勢が必要である。アジアの審判もむしろそれを求めている。最も避けたいことは、誤った運用をあたかも FISA ルールであるかのように勘違いし日本に持ち帰って拡散させてしまうことである。我々は日本の国際審判員として、国際ルールを正しく日本に伝えること、そしてボート先進国としてアジアの水準の向上に貢献しなければならないということを今回も強く感じた。

また国際大会の連絡手段の特徴として、無料通信アプリである「WhatsApp」という機能を用いたものがオフィシャルに使われている。POJ からの審判業務に関する連絡はもちろんレース変更など競技情報や OC からの生活に関する情報もこの機能で発信される。発信は双方向から可能で画像の送信も可能なため、アクシデント発生の際もリアルタイムで状況を共有することができる。非常に合理的なシステムではあるがデメリットも多く感じた。各個人のスマートフォン端末を使うため通信環境や業務状況によっては受信・閲覧ができないことや、重要な情報が発信されたとしても気が付かないままの審判員もあり、情報の統率に問題があると感じた。業務やレースに関する情報と、記念写真などの娯楽の情報が入り混じるシーンも多く、通信アプリによる情報の位置づけが曖昧だと感じた。むしろ、意思疎通や情報連携においては各部署に配置した無線による日本方式のほうが確実であり、合理的で確実なオフィシャルの情報伝達手段とするには、アプリの使い方にさらなる注意と工夫が必要だと感じた。



2019 Asian Rowing Cup
2019 Asian Rowing Masters Championships
2019 Asian Rowing Junior Championships

<日本クルー>

今回、日本からはジュニアの男子シングルスカル、女子シングルスカル、マスターズのエイトと3クルーが参加していた。皆タイ OC の不慣れな運営に戸惑いながらも大会を楽しんでいた。

レースのため残念ながら表彰式は見る事ができなかったが、女子シングルスカルの上野美歩選手が2位、男子シングルスカルの菅原陸翔選手が4位、マスターズエイトが優勝した。



日本選手団と派遣審判員の間で出発前の連携や情報提供はなく、現地で初めて顔を合わせる状況だった。現地では可能な限り派遣審判からチームへのアドバイスや情報提供するなどチームジャパンとして大会に臨むことを心掛けた。派遣審判員の情報に選手団に事前に分かっていたらさらに効果があると感じた。協会内での組織間の連携が円滑になるよう工夫したい。

<最後に>

様々なトラブルがあったものの、大会は無事に終了した。与えられた環境の中、組織委員会や多くの NTO、ボランティア、そして POJ を筆頭とした ITO 審判団の連携の成果だと感じた。期間中は多くの障壁があったものの、最後は「FUN ROWING」の精神で皆が笑顔で幕を閉じた。水不足やボートの不足がありながらも、それでも大会を実施するというタイ協会の大きな責任感を見た。国際大会を運営するにはレースのみならず移動、生活、財務面に関して多くの方のエネルギーが必要であることを実感した。日本で国際大会を開催すべきだ、とは決して簡単に口に出せないことだが、アジアの中の日本に期待されていることが数多くあると感じた。創立 100 年を迎えた日本ボート協会の一員として、アジアの中の日本に課せられた責任を果たせるよう ARF に貢献していかなければならないと感じた。その中で国際審判員としてできることを考え、日本ボート界の国際化にも貢献できるよう一歩ずつ歩んでいきたい。

日本を代表して審判員として大会に参加させていただいたが、そこに多くの方々のご理解とご尽力をいただいていることに、深くお礼を申し上げます。

以上